DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

フタメタモル2

プメクモル 2

04 マエガキ
05-19 雪路時愛
20-24 味燐ふーか
25 アトガキ
26 奥付

初めましてやそうでない方もこんにちわ。雪路時愛（ゆきじしあ）です。
んーちゃかむーむー同人誌第五弾目となったこの本を
お手にとって頂きありがとうございます。
前回のけいおん本『フタメタモル』の続編でございます！
でも、『フタメタモル』を読んだことがない方も、読んだことある方も
楽しめる内容なのでご安心ください♪そして今回もふたなりですw

今回のお話は、『卒業後』がテーマになっております。
そして唯あず!!（＋その他の方達）
一度は描いてみたかった、たくさんのお兄ちゃん達に囲まれちゃうお話です。
味燐ふーかちゃんの小説では唯とあずにゃんのラブラブ話が読めますよ☆
表紙の絵とリンクしているところもあるのでそこに注目してくださいッ

漫画も小説も最後までお付き合い頂ければ幸いですっ。
それではお楽しみくださいませ！

2010・12月　雪路時愛

今日は部室へようこそ♪

まだ部員は私だけですが

これから皆さんと一緒に軽音部を盛り上げていきたいと思ってます…

んー…ちょっとかたいかな？

あずにゃーん♡

ガバッ

ふぇぇっゆ、唯先輩!!??

今日はあずにゃんのことが気になっちゃって来ちゃった♡

卒業したのに来ないでくださいっっ!!!

しかも制服で!?

まぁいいじゃないかぁ～

あれ？未だに部員はあずにゃんだけ？

は、はい…

先輩を不安がらせてしまっちゃ駄目だ

でも！絶対軽音部は廃部になんかさせませ…

あずにゃーんそんなことよりお茶しよ～

ちょっ…
唯先輩っ
やめてくださいっ

もしこんなところ
見られでもしたら
変に思われるじゃ
ないですか！

だってさー
私達が軽音部の時は
よくお茶してた
じゃんかー

もうそういうのは
やめたんですっ！

ほら

…ッ

あの時みたいに
あずにゃんのミルクで
紅茶飲みたいな…

また先輩に
私のおちんちん

ふぁ…
やめてくだ…

ほら…
あずにゃんの
恥ずかしい秘密…

遊ばれ…
ちゃうのかな…

あ

あずにゃんちんちんは素直だねぇ

何か期待してるのかな？

ひぁッ♡

あ♡

先輩の息が勃起したおちんちんにあたってぞくぞくする

はぁ♡はぁ♡

あ♡

あ♡あ♡ふぁ♡

ちゅっちゅ♡ちゅっ♡ちゅっちゅ

ぷちゅ

ぷちゅ

ぷはぁ…

こうやって おちんちん 食べられるのって 久しぶりじゃない？

久しぶり…だから？ 身体が敏感になってる

初めておちんちんが生えた日から毎日のように私達に遊んでもらってたけど

卒業してから遊んでくれる人がいなくなって

おちんちんさみしかったんだよね？

んぁあ♡

やぁ♡すぁ♡

そう… 本当は触って欲しかった

唯先輩に触って欲しかった

そんなこと な…

ぎゅるるっ！

ぎゅるるっ♡

嘘つき

ぞくぞくっ

嬉しいもっとしてっておちんちんが汁出して喜んでるよ

あーん

ぱくっ

あぁ♥

しゅっしゅっしゅっ

うれしいっうれしいよおっおちんちんうれしいのぉ♡

ぎゅうぅぅぅぅ

ぶぶぶぶ

あぁぁぁぁ

なんなにっ

すごいっ

だめぇぇぇ♥

ちゅぱ

ぢゅぱ

ぢゅぱ

ぢ

ぷるっ
ぴくっ
ぴくっ
ぶるるん
んもぅ！
あずにゃん！出すならいつもみたいにコーヒーカップに出さなきゃ
ごごめんなさいっ
じゃーん
今日はそんな淫乱ちんちんのために
こんなものを用意しちゃいましたあっ！
ぐしゅ
ぐしゅ

ひッ
ぴくっ
ぴくっ
ぴくっ
機械見て興奮しちゃった？
おちんちんのミルクを搾る機械だよお
こうやってぇ装着して…
あんなのでおちんちんミルク無理やり搾られちゃうの？
ぐぷぷぷ

びゅるる!!…

あぁぁぁ

早速イッちゃったね あずにゃん溜まってたのかな?

ちゃーんと自分でもシコシコして出さないと身体に悪いよぉ?

あ、出してもそんだけ溜まっちゃうのかな?

一瞬ででちゃった…

機械なんかに搾られちゃった…

ひゅるるるるっ…!!
ぎゅ
ぎゅ
ぎゅ

あずにゃん！はやくペロペロして！
ひっ！♦
だ、誰ですか!? やめてくださいっ
皆、あずにゃんの為に集まってくれたんだよぉ♪
びくん！
いやあっほっぺた擦らないでっ…
俺のも！
あずにゃんほっぺやわらけぇぇ

ほらー
あずにゃん！
一人だけじゃなく
こっちもかまって
あげてぇ～

すとーっぷ！
もー！！
順番！順番ッ！

ゆ唯ちゃんの
パイズリ
すごくいいよぉ！

あずにゃんのお口
小さくておちんちん
全部入らないね

あずにゃんの
小さな手が　手があ

唯ちゃん
ザーメンでるよぉ
受け止めて!!!

あずにゃんの
口まんこに
出る　出るーッ

どうしよう…私精液2回飲んだだけなのに…

イキそうになってる…

さて、お次はあずにゃんのいきまくりの敏感おまんこも可愛がってあげてぇ♪

やぁっ恥ずかしいですぅぅ

ぷはっ

はっ はっ

はぁはぁ

ぴくっ ぴくっ

ぴくっ

ぴくっ

あとがき

それにイッてるのはおちんちんだけで…

すっ!!

ぐちゅぐちゅ

あずにゃんおまんこ凄くしまってるよおおおお

あんあああああ

ぐぐぐん

本物のおちんちん挿れられちゃった…

私もおまんこにも
おちんちんたくさん
挿れてよおお

はぁ はぁ はぁ

あ♡

きもちいいです♡
突いてください♡
あ♡

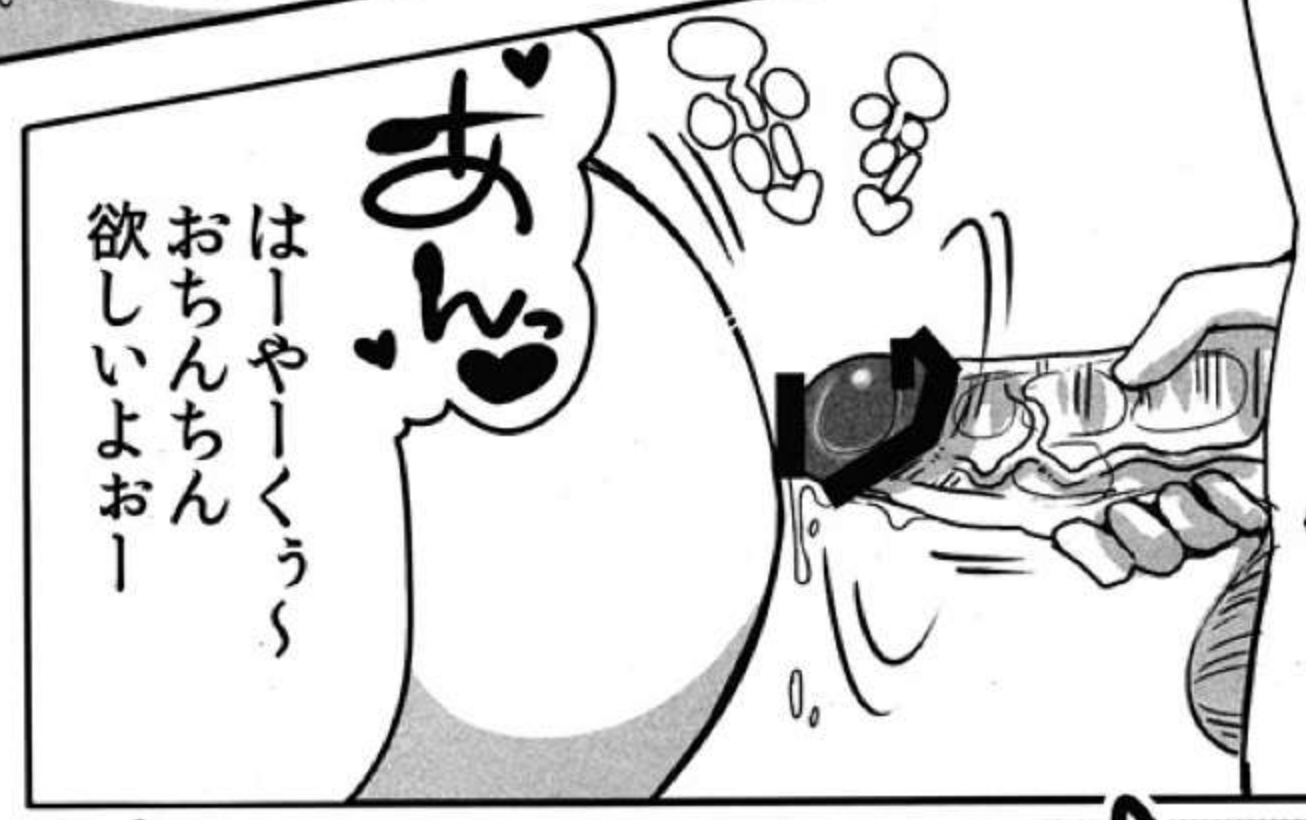
あずにゃん
こっち向いて

ちゅっ ちゅ

唯ちゃんおまんこも
たくさん可愛がって
あげるからねぇ

くちゅん
くちゅっ
くちゅっ
くちっ

ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ
ぱちゅっ



ドドドド
ドドドド
ドドドド

あっ
機械が壊れ
ちゃった…

せ…んぱ…い

ぶるるっ

はぁ♡

はっ

はっ

でおも
おしまい…
ですか…？

ちゃく
ちゃく

ちゃく
ちゃく
ちゃく
ちゃく

ちゃるん

ちゃるるる…

まだだよ
あずにゃん

おいしい紅茶を飲むには
もっとたくさんのミルク
搾らなきゃ…ね♡

ほら～あずにゃん
本物のおちんちん挿れられながらびゅーびゅーってコップに注いで
ガク ガク
どくん
唯ぜんぶ出しちゃ
あとでぜんぶ飲んでもらいます
トプ トプ

あずにゃんっかわいい♡かわいーよぉ♡
あぁ♡まだイッてる途中ですぅ♡
ぱくちゅっ ぱくちゅ
ぬちゃ ぬちゃ
ぶるぶる
まだまだイきそぉ♡
私もぉ～♡イクぅ～♡
ぶくぶく

ビク
ビク
ちぎ
ちぎ
ゴポ
ゴポ
ゴポ
ゴポ
ゴポ
ゴポ
ぴゅっ
ぴゅっ!
ぴゅっ
ぴゅーっ!
ビキ
ビキ
どくっ
ビュク!
ビュッ
新入生の皆さん
軽音部特製の
紅茶は如何ですか?

先輩達が卒業してからというものの、軽音部の部室にはいつもの空気がかき消されるようになったかに思ったけれど…そんなことも無く卒業しても先輩達は遊びに来てくれている。

私は、部室のドアを開けると唯先輩が部室の机に座って、部室で溺愛しているギターのギー太の手入れをしていた。

一人になるのは怖かったけれど、何とかやっていけるそんな気がして、相変わらずの先輩達だけどそれでいいと感じていた。

「唯先輩！卒業しても部室にいるんですね。やっぱり部室が恋しいんですか？」

「あ、あずにゃん。うん、そうだね。やっぱりここは私の好きな場所なんだなぁって思ってね」

「まったく…唯先輩は…」

「でも…あともう一つ理由を付けたら…」

机に座っていた唯先輩が私の前に近づき頭を撫でながら微笑みかけながら話しかけてきた。

「学校に来たらさ、もれなく！こんなに可愛いあずにゃんにも会えるしね」

不意打ちだった、どうしよう凄い顔が熱い……そんなの唯先輩言わないで。本当言ったら凄く淋しかった。

「唯先輩…顔が近いですっ…そんな事言われたら私…」

「へへっ、あずにゃん…顔が赤くなってる～」

唯先輩は天然ボケなのかよくわからないけれど、そんな事言われたら動揺しても仕方ないと考えるのが普通だと思う。

「ギー太も部室で練習してぇ～って言ってるし、こうやってチューニングしたら…あれぇ～チューナー忘れてきたのかなぁ」

唯先輩は鞄の中をゴソゴソしながら、困惑しているのを見ているとどうしても放っておけなくなる…。

これが唯先輩のいい所って言ってもいいんだけど、たまに年上なのを忘れてしまう。

「はぁ……練習するのにチューナー忘れたんですか？確か…部室に予備のがあったはずなんで一緒に取りに行きましょう」

「うわぁ～ありがとう…あずにゃん」

私達は倉庫に移動し倉庫にある箱を手にして探し始めた。

以前に私が倉庫に訪れた時に一度見たことがあったのをふと思い出した。

「確か…ここらへんだったんだけどなぁ…」

「そういえば、皆で倉庫の片付けもしたなぁ～なんか思い出しちゃったよ～」

思い出に振り返りながらも倉庫を見渡す、そうすると奥のほうで怪しそうな箱を見つけた。私はそこへ移動して箱を開けようとした時だった。

唯先輩は違うものを見つけたらしく何か企んでいるかのように自慢げに見せてきた。

「あずにゃ～ん、なんか凄いのみつけたよ」

「それ、何ですか？ちょっと変なの持ってこないで下さいっ」

「いいじゃん、いいじゃん～これなんだと思う？」

黒っぽいビンに入った液体の薬品で名前を見ると『物質 ×』と書いてある。怪しい…怪しすぎる。

「物質×…」

「なんか凄いよね！すっごいギターが上手くなるとか深宇宙みたいな感じがするよぉ～」

「深宇宙とか…じゃなくって、どう考えても怪しいですって」

「そうかなぁ～ちょっとベタベタするなぁっと…おっとっとと」

「唯先輩っ！零れる！こぼれるぅ～」

「きゃぁぁぁ～」

唯先輩の持っていた液体の蓋が少し開いていたらしく、唯先輩が少し身体を揺らした時に私のスカートに着いてしまい。丁度、股の所についたせいでスカート濡れてしまったので替えの服も無い。どうしようか…。

「ご…ゴメン…零すつもりじゃなかったんだ…ハンカチ取って来るね」

「……もういいです、自分でします」

「あちゃ…本当にゴメン……先生に言って替えの服借りてくる」

血相を変えた先輩は私に誤りながらいろんな事をしてく

れるけれど、起こったことは仕方が無い。しかし…この液体はどこから…それに効能は何なのか知る由も無い。
何かあったらどうしようと思っていた矢先だった。
何か股の所がムズムズする。何というか……身体に違和感がある。生えていると言ったほうが正しいそんな感覚。
「ハンカチ置いておくから、職員室行ってくるね」
「唯先輩っ！ま……待ってくださいっ！」
「ふぇ？何？何かあったの？」
「こ…こんなの大丈夫ですっ…でも…さっきの液体でこんなのになってしまったとかそういうの関係無いです」
「めちゃ関係と思うんだけどなぁ…」
目の前にいる唯先輩に恥ずかしながらムズムズする股を隠しつつ、自分の身体のクリトリスが膨張してチンポになったことを告白した。
「さっきのでなったんだよね……そういえば…この前も…そういうのでなったような…」
私の目の前で何か思いついたように先輩はニヤニヤしながら私に話しかけてきた。
「そうだぁ～さっきの液体…っと」
「唯先輩！何するんですか？」
唯先輩は例の液体である物質×を手にとって股に摺りこみ始めた、そんな事したら私と一緒になってしまうのにどうしてわざわざするのか皆目分からなかった。
「ふふ～ん、あずにゃん見てたらさ、私もそんなふうになりたいなって思ってね」
「も…戻らなくなったらどうするんですか！もう少し考えて下さ…い」
「大丈夫だって、さっき効能の所見たんだ。そしたらさ、ふたなりになったら射精すれば戻りますって書いてたの見たんだ」
射精すれば戻る…という事は唯先輩の前で私はどうしたらいいんだ。辱めにも程がある。それに先輩の前で弄ったりするなんて恥ずかしい。
「射精…ということは…」
唯先輩はその後、ゆっくり私に近づいて部室の倉庫で二人で見えないように額に軽くキスをした。それから笑って私に話しかけて、私の手をふたなりになった唯先輩の股間に当てた。
「あずにゃんとエッチしよって事かな？私もこんなことになってるし」
「え…えーと…唯先輩…」
「どうせだったら、学校だし…ちょっと面白い所でエッチするのもアリかなぁ…うんうん楽しそう」

※

私がオドオドしている間に唯先輩は私を学校でも人気がある場所へ連れてきた。連れられている時は私のアソコがふたなりになってる事を気付かれたらどうしようとか考えてしまう。考えたら考える程、私のアソコがムズムズしているのがわかるのが恥ずかしい。そして、連れられた場所は講堂の裏だった。今日は他の生徒も集まっていてこんな所でするなんて先輩どうかしてると思う。
見られたらどうするつもりなの。私がふたなりになって辱められているのを見られたら…。こんな変な姿見られたらきっと晒しものにされる。
「ゆ…唯先輩！こんな所でなんて無理です…」
「そうかなぁ…楽しそうだと思うんだけど～」
「楽しそうだなんて呑気な事言わないで下さい…私はこんな…こんな」
目尻が熱くなり泣きだしそうになった。私がふたなりになっているのに唯先輩は呑気に遊んでいて、どうしたらいいかわからない。
「……あ、ゴメン…泣かせるつもりは無かったんだ…嫌なら止めるよ…」
「でも、あずにゃんがちょっと恥ずかしくなる所見たかったんだ」
唯先輩は私の顔を見つめてちょっと赤くなりながら言った。
唯先輩はストレートに言ってくるから私も恥ずかしくなる。
「唯先輩……え…エッチ…」

「エッチ？そうかなぁ～私そんなにエッチだったんだ」
「そうじゃなくて……その…ここでエッチして…いい…です」
「ほ…本当？やったぁ～あずにゃん、キスしよ」
「唯先輩…私…せんぱ…」
木陰になっていてちょっと死角になるような場所に隠れてキスをした。最初は柔らかくて優しいキスでそれから何回かキスをしていく内に舌を絡めるキスに変わっていく。吐息が近い…唯先輩の舌が私の舌に絡みついてきて舌と舌が擦れる度に何度も重ねたくなる。
「……ふぁっ……ゆい…せんぱぁい…」
「はぁっはぁっ…キスってこんなに気持ち良かったんだね…」
「わ…私も……そ…そんな事ありませんっ…」
恥ずかしくてつい強がってしまった。そんな事知られたらわけ分からなくなるくらい壊れそうで言えない。考えたら考える程、顔が熱くなってしまう。
「どーして？こんなにも顔が赤くなっているのに…」
「赤くなんかなってません…ったく唯先輩は…」
「素直になったらいいのになぁー私は知ってるよ、あずにゃんのそういうのが可愛いってさ」
さっきまで考えていた事が水に流されたように唯先輩の言葉が胸に響いていた。唯先輩が私の事をこんなに知っているなんて思っていなかったからだ。私は身体の力が一気に無くなってしまい。その場で座りこんでしまった。

「あ…あずにゃん…大丈夫？」
「だ…大丈夫です…なんか私が思っていたより唯先輩が私の事知っていたから…ちょっと気が緩んでしまって」
「そっか…それなら良かった…」
「唯先輩…続きをして…ほしいです…」
それから、もう一度キスをしながら唯先輩は私の胸に触れてくる。先程のキスで気持ちよくなったせいか触れられる前から乳首が勃起していた為か制服の布が擦れるだけで感じてしまう。
「あはっ…あずにゃん…もうこんなになってる…こうやって触っているだけでも分かるもん…それに触れる度にあずにゃんの声が可愛くなるから」
「…ゆい…せんぱいっ…」
「もっとしたくなっちゃうー！よーしブラウスの上から舐めちゃおっと」
「…やだぁ…せんぱいっ！わたし可愛くないからっ…そんなの…汚れちゃうし…」
段々、ブラウスが唯先輩の唾液で透明になっていく…濡れていく度に唯先輩の舌先がよく分かってきて、二つの事が重なって恥ずかしくなってくる。
「もう汚れてるからいいじゃん…それより…あずにゃんのおっぱい凄いキレイだよ～ほら…ピンク色で可愛いっ」
「だから…可愛くなんか…」

唯先輩は自分のブラウスをはだけさせてブラジャーを半分脱いで自分の乳首を私の乳首に擦り当ててきた。
「見ていたら擦りたくなったんだ。ほら私の乳首もこんなに勃起してる…凄いよね…」
「はぁはぁ…ん…っ」
唯先輩の乳首も勃起していて私と同じのが擦れて…身体の底から湧き上がってくる感覚になってくる。何だろう変な感じ。下半身の膨張したチンポが揺れ動くのが止まらない。パンツは膨れ上がったチンポのせいでほぼ脱げていて履いていない状態に近くなっていた。
「き…気持ちいいね…あずにゃん…」
「あずにゃんのチンポ……さっきから揺れ動いていてなんだか苦しそう…どうして欲しい？」
「先輩ってそんなキャラでしたっけ？ど…どういう事って言われても…」
「気持ち良くなりたい？それとも放っておこうかなぁ」
意地悪そうに唯先輩は笑いながら言う。どうしたらいいってそんなの決まってるのに唯先輩の考えている意味がわからない。どういえばいい…。とにかくこの膨れ上がったチンポをどうにかして欲しくて溜まらない。
「……チンポを…どうにかしてほしい……です……」
「どうにかする…か…じゃあこんなのとかどう？」
と、私のスカートをたくし上げたかと思うと唯先輩は私の膨

張したチンポを乳房で挟み込んで擦ってくる。柔らかい感触と自分が出していた愛液で滑りが良く感度が益々上がっていく。

「ふぁぁぁぁん…せ…せんぱぁい…擦れてっ…」

「あずにゃんのチンポ凄い汁垂れてて私の胸ベタベタだよぉー凄いよね、汁だけでこんなに濡らしちゃうなんて…」

「はぁはぁん…そんなに言っちゃ…」

女の子の胸ってこんなに気持ち良かったんだ。柔らかくてスベスベしていて気持ちがいい…こんなに気持ちよくなってしまったらおかしくなってしまう。

「普通に擦るだけじゃ…面白く無いから…今度はあずにゃんのチンポを舐めてあげるね…」

唯先輩の乳房からはみ出ている亀頭の部分から舌先の感覚を感じる。凄い…一人でオナニーした時みたいにクリトリスを刺激している感覚に陥る。ダメだ…もう我慢出来ない。

「はぁぁ…はぁぁん…もっとしてぇ…もっと…この感じが好きなの…」

「はぁっはぁぁん…あずにゃんの顔凄い色っぽくて可愛い…」

「唯先輩…逝っちゃう…逝っちゃうぅ…あぁぁぁあっ！！！」

「出してぇ…私の口にトロトロの精液を出してぇ…」

絶頂に耐えれなくなった私は唯先輩の顔と口に溢れんばかりの精液をぶっ掛けてしまった。精液の量が多かったみたいで唯先輩の顔が精液まみれになってしまうくらい掛けてしまった。

「ふぁぁぁん…ごめんなさい…ごめんなさい…気持ちよくって唯先輩の顔にかけちゃって…」

「いいんだよぉ…こんなに気持ち良かったんだよね…ほら…こうやって吸い上げたらもっと出てきそう」

逝ったばかりの痙攣したチンポを唯先輩は口に含んだ。そうすると痙攣したチンポが再び元気になっていく。射精したら戻るどころか治りそうにも無い。まだ、逝ききれて無かった分が後から後から出てきて唯先輩の口内を汚す。本当にごめんなさい…だけどまだ出してしまいそうな程に気持ちいい。

と、唯先輩は私と対面するように座らせてチンポを擦りながら言った。

「気持ちよくなったみたいで嬉しい…私のチンポがこんなに硬くなってて苦しいの…だから今度は私が気持ちよくなりたい…」

「ゆい…せんぱい…」

「私、あずにゃんのお尻の穴に挿れたいんだ…挿れてほしいってさっきからヒクヒクしてるんだもん…」

「ひゃぁぁぁあっ！！！そこは…」

「静かにして…ここは外だよ…それにもうすぐ皆が外に来るかも知れない…静かにしなきゃ…バレちゃう…」

「だって、そこに挿れるのは…」

「大丈夫…我慢出来ないよぅ…ソレっ！！」

ヌルヌルした粘液が私のお尻の穴へと誘うのが分かり、その直後に中へとチンポが挿入されていくのがよく分かる。マンコでオナニーする時とはまた違う感覚でお腹の中をかき乱すような圧迫、不思議な感覚になる。

「あぁぁぁっ！！あぁぁぁぁ…ゆ…ゆいせんぱい…」

「あずにゃんはエッチだねぇ～お尻の中までトロトロになってる…マンコも変な汁たくさん出てるし…」

唯先輩のチンポがお尻の穴で動いているだけでも凄く気持ちよくて昇天しそうなのにそれなのに私のマンコに唯先輩は手で愛撫をしてくる。

「あずにゃんのマンコ温かい…アツアツだ～ねぇねぇ…もっと挿れれるよね…」

「はぁはぁ…ゆ…ゆいせんぱい？？何する気なんですか…」

「えへへ、あんまりにも温かいから手を挿れちゃいたいなって…トロトロになってて美味しそう…」

私のマンコを愛撫していた手首が段々私のマンコの奥へと挿入されていく、お尻の穴に挿れられたチンポでも圧迫されているのに、マンコにまで挿れられるなんて思ってもいなかった。

「膣(なか)で広がっていく…あずちゃんの膣(なか)気持ちいい…マンコに手を入れられてこんなにいやらしい事を外でしているんだよ…」

「ううっ…こんなのになるなんて…嫌じゃないけど…」

外でエッチしている事を改めて意識した時、二人の鼓動が高くなりチンポを先程よりも熱くさせる。唯先輩のチンポがお

尻の穴で大きくなってる…お尻の中が擦れて気持ちいい。もうどうにかして欲しいそんなくらいに錯乱状態に陥ってきた。絶頂に近いのか唯先輩の腰の動きが段々小刻みに動いていき、私の中をかき乱していく。

「はぁん…はぁぁぁん…ゆいせんぱいのチンポが擦れてぇ…手がはいってぇ…」

「わ…わたしも凄い気持ちいいのぉ…あずにゃんのなか気持ちよすぎて…もうダメなのぉ…」

「うぁぁぁっ！！逝っちゃう！！あずにゃんのお尻の穴にドピュ―って精液出ちゃうぅ」

「あぁぁぁっ！！出るぅ～出る！！私もいっちゃうぅぅ…また唯先輩の体にかけちゃうのおぉぉ」

「あぁ――あぁぁぁっ！！」

絶頂を迎えた私達は丁度チャイムが鳴った校庭の片隅でお互い体に精液をぶちまけた。

唯先輩の精液が私のお尻の穴に溢れそうな程に注ぎこまれて滴り落ちそうになっている。力んだら出てきそうだ。

「はぁはぁ…あずにゃん…好き…好きだよぉ」

「唯先輩……私も好きです…だけどもうこういうのは許しませんからね」

※

部室へ戻った私達は薬品を見てふと我に返った。そういえば目的って何だったのかと…。先程からあったことを振り返りながら辿って行く所、数分間…。

「ねぇねぇ…確かこの薬品でふたなりになってからあーなってこーなって…」

「……あんまりそんなに言わないで下さいっ！恥ずかしいじゃないですか！でも…下半身治ってないんですけど…」

「えぇぇっ！！どうしよ～私も治ってないのぉ」

「説明よく読んで下さい！ったく私が読みます」

ビンを手にした私は注意書きの部分を目にしたそこには『本薬品は個人差があり、効能が効き過ぎる場合は最低一週間はふたなり状態であることがありますので注意して下さい』と書かれてあった。

「ど…どうするんですか…一週間このままなんて困ります…唯先輩のせいで…」

「へぇ～そうなんだ。ふふっ、だってまたさっきみたいに出来るしいいじゃん」

「そんな呑気な事を……でも、唯先輩なら許します」

唯先輩なら許してしまうそんな事を思いながら私はふと廊下側の窓を見ると影でクリーム色をした長い髪の毛の影が揺れ動くのを見た。見覚えがある顔かなと思ったがあまり気にせず再び部室を見渡すと唯先輩がまた変なマスコットで遊んでるのを見てホッ「可」しながら過ごすのであった。

アトガキ。

最後まで読んで頂きありがとうございました!!
今回のけいおん本は如何だったでしょうか？
前回　澪×あず＋律で、今回は唯×あず＋その他。
初めての展開(女の子以外の登場人物が出てくる)に挑戦してみましたー！
らぶらぶもいいけどたまにはこういうのもイイネ！と思って頂けたら嬉しいです
今回も商業と同人の締め切りがほぼ重なっていて大変でした～
無事に出せてなによりです(´･ω･`)ホッ
ほぼ寝ずに頑張って作ったこの本を大切にして頂けると嬉しいな…

ちなみにあずにゃんに使われてた器具は実際にあります～
興味のある方はググってくださいww
そんな人はいないか(´ω`)

次の本もお付き合い頂けたら嬉しい限りです♪
それでは、またお会い出来る日まで～

2010･12月　雪路時愛（ゆきじしあ）
http://ncyakmmu.x.fc2.com/

そんなふたりで大丈夫か？　大丈夫だ、問題ない。
さーて、ゆいあず本ということで書かさせてもらいましたが、
前回のフタメタモルの続きものに近い内容になっています。
最近ラブラブな内容を書く事が好きなので楽しく、そしてネットリな感じで書けて楽しかったです。
来年はまさかの映画化という事でまた彼女達が大暴れするのを見れるのは嬉しいものですね～：）
へんげい！というネーミングと内容で出てくる物質については元ネタのあの方のモチーフですw（またかい）
そんな感じですが、また機会があれば書きたいなと思っています。
もしよかったらもう一度読んでみて下さい♪ではでは～

2010年　12月31日大晦日　味燐ふーか（@深宇宙でキャハハ）
http://blog.livedoor.jp/sora_san3/

奥付

■ フタメタモル2 ■

発行日:2010.12.31

イベント:ComicMarket79

発行:んーちゃかむーむー

著者:雪路時愛&味燐ふーか

HP:http://ncyakmmu.x.fc2.com/

Mail:n_cyak_mm@yahoo.co.jp

印刷所:大陽出版様

18歳未満閲覧禁止

本作品の登場人物は全て20歳以上です。

画像の転載、データ化、web等でのデータの共有はご容赦ください。

K-ON!!

fanbook

'n'-cyak-m-mu-

PRESENTS

2010.12.31